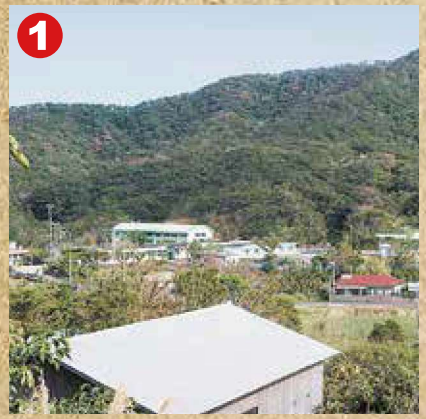
喜瀬（きせ） Kise

喜瀬・里・浦



コッチ（川内）

山間の奥に位置し、水に恵まれた地域をコッチと呼んでいる。ここも喜瀬の奥座敷的要素が残る集落である。東側の山はナナサク、ナナンデーと呼ばれ、いくつもの小さな水路を有し、戦後までマタダ（谷戸）で稲作が行われていた。集落北側の台地には、旧喜瀬小学校と旧用安小学校を昭和38（1963）年4月に統合して創立された緑が丘小学校がある。

チュマワシダ

チュマワシダと呼ばれている緑が丘小学校の位置する台地には、北側から西側にかけて水田が広がり、北側山裾には数軒の民家がある。自然環境に恵まれていて、棚田状をなす田んぼの脇にはイジュンゴ（湧水）があり、地域では水道が普及するまで「チュマワシダのイジュンゴ」として評判になった名水で、今もコンコンと湧き出ている。

ムンタヤマ（喜瀬グスク）

山の名前は「ムンタヤマ」と呼ばれており、津波の時の避難場所でもあったと古老は話す。上は畑になっているが、いくつかの城郭の跡が確認できる。炭焼き小屋跡や土塁状遺構、石積等とともに、カムィヤキと青磁が確認されていることから13、14世紀頃の中世居館施設から城（グスク）へと移行したことが考えられる遺跡である。

カタバル

カタバルは宮久田川河口東側が浮島になっていた時の呼び名である。昔は中洲のようになっていて若い男女などが唄遊びをする場所でもあった。島唄に「ナンガチ　キソメイシュ　ハ　カタバル　カチ　マァー　ノリガ」という唄もあり、喜瀬の唄は「キシ唄」と言われるぐらい独特の節回しで、唄遊びが盛んだったことが分かる。

ナンサキとイジュンゴ

ナンサキはイットン集落から喜瀬集落に大きくカーブする先端をさす。イットン寄りのナンサキからナーノに登る道には神道とイジュンゴがある。そこは、カミサマが禊をするところでもあり、イットンの人たちの水汲み場所でもあった。ナンサキ周辺はクビキリャウワァ（首のない豚）が通ると言われ、畏れられる場所である。

ナーノ

ナンサキ西側からナーノに登る道には神道とイジュンゴがあり、さらに山道を登ると見晴らしのいい山、ナーノの尾根が続く。ナーノ一帯も信仰のある山とされているが、詳細調査はまだ行われていない。昔から見晴らしのいい場所として古道を歩くとき、休憩する場所でもあり、喜瀬湾一帯が見渡せる絶景が広がる。

ノロ墓

イットン集落の西側はずれの山裾にサンゴのナバイシで四角に囲われた墓箱形石棺墓がササ藪に覆われている。ササをかき分けて入ると、サンゴ石の蓋が少しずれた状態で残っている。墓地の形状はノロの墓であるが、地域では「昔、ここは関所のようで侍が立っていて首をはねたらしい。」と言い伝えられ、集落の人が一番畏れる場所でもある。

シロウラザキ（出兵兵士を見送った場所）

県道はイットン集落の南側を通り、龍郷町との境界シロウラザキを大きく南にカーブする。シロウラザキからはイットン集落や喜瀬湾が眺望できる。

戦時中、徴兵された兵隊が家を出る時は、「また家に戻ってこられるように」との願いを込め、トゴラ（炊事場）のスバヤド（軒下）から出て、シロウラザキまで行き万歳三唱をして見送ったという。

喜瀬1区（喜瀬）（きせ）※方言名：キシ

奄美市一集落1ブランドにも指定されている「かくれ浜」がある喜瀬集落。

大潮の干潮時だけ現れる砂浜で景観のすばらしい観光客に人気のスポットです。また、熱帯・亜熱帯地方に自生する植物「シイノキカズラ」の北限域の生息地である。

昔は、奄美島豚の在来種ともいわれる「喜瀬豚」が有名であったが、今では改良種のみになっています。

パッケマラ山

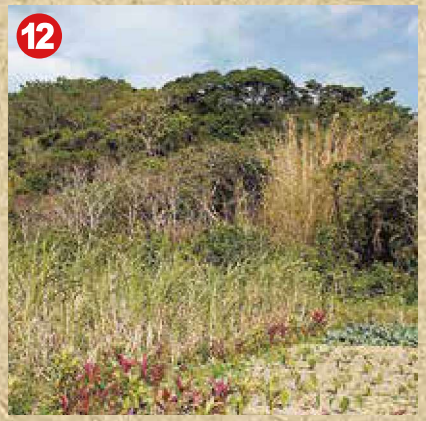
パッケマラ山は集落の中心に位置する標高100mの山。この山を挟んで北側の宮田地区と南側の里地区に分かれている。古老は「山頂付近が男根の形に似ているからその名がついたとも言われている。大昔に津波があって、この山に逃げた男女二人だけが難を逃れ喜瀬(キシ)集落を作ったという伝説がある」と話す。

宮田城(タナグスク)

パッケマラ山から西側に伸びる尾根は標高45m付近で細くなり、手のひら状に広がる。台地をなす標高約25mあたりから放射状に延び、城郭を利用したソテツバテになっている。付近には土塁と石垣遺構の区画が残り、郭からは中国産の青磁片が出土している。また、一帯はケンムン出没の場所とも言われ、大変畏れられている場所でもある。

ノロ墓

標高約20mの台地は舌状に南に延びる、その先端の集落と喜瀬湾を一望できる場所に箱形石棺墓が2基露出したノロ墓がある。中には人骨や日本刀を見ることができる。下方に現在の墓地があり、パッケマラ山からグスク、ノロ墓と連なる一帯は、シマの人から畏れ敬われている。現在は草に覆われ行けなくなっている。



トノチ

喜瀬墓地から宮田城の麓の道を東に行くと集落に入る。集落は麓と畑を挟んだ南側にあり、昔はほとんど水田だったという。宮田城の南側の麓の奥まった場所にある一画は、ホウライチクやガジュマルに覆われ「トノチ」と呼ばれている。北側の宮田城、神山、ノロ墓、トノチと神が宿る神聖な場所とされている。

ムリ(森)

集落後方にあるムリは、東から続く細く低い尾根の先端部がコンモリした森をなしている場所。奥の山は標高183mのナナンデー(七ン岳)の裾野が入り組んだマタダ(谷戸)をなし喜瀬川の上流でもある。ムリは、集落から一定の距離を置き、後方の尾根はソテツバテであることからも山間の静寂さが漂う。聖域的な場所である。

サトンゴ(里川)

集落後方のムリを挟んだ二つの川が集落で合流している。国道の橋の欄干には「喜瀬川」と記されているが、集落の人々はこの川を「サトンゴ」と呼ぶ。二手に分かれた川にはそれぞれ「イディ」(堰)があり田に水を引いていた。野菜洗いや洗濯、河口は牛の水浴びなどに利用していた。上流の水は、集落水道として現在も使用されている。

イジュンゴ

ムンタ山と呼ばれる標高約25mの城遺跡がある山の北側麓には「クボタのホォジロサマ」と呼ばれる集落共同井戸がある。「水汲みは子供の仕事だった。毎日使う飲料水は細いあぜ道を担いで運んだ。」と古老は話す。数年前、有志により再現された。

古道

集落後方に、ムリと水田からナナンデー(七ン岳)を超え土浜集落に通じる古道がある。道中のヌシロダのトンネル風のイジュンゴは畏れられていた場所で、古老は「石を落してもイナゲ(しばらく)して音がする。土浜にムクンニャ(タカラガイ)を拾いに行くときは数人で行った。」と話す。聖域の山々(ナナンデー)の古道は、身も心も清められる。現在は行くことができないが入口が確認できる。

喜瀬2区(里)(さと)※方言名：サト

奄美市一集落1ブランドにも指定されている「かくれ浜」がある喜瀬集落。

大潮の干潮時だけ現れる砂浜で景観のすばらしい観光客に人気のスポットです。また、熱帯・亜熱帯地方に自生する植物「シイノキカズラ」の北限域の生息地である。

昔は、奄美島豚の在来種ともいわれる「喜瀬豚」が有名であったが、今では改良種のみになっています。

ヒュックラ沖

喜瀬浦の海岸線北側、打田原との境界はヒュックラ崎と呼ばれている。ヒュックラは喜瀬の人たちの漁場にもなっており板付け舟で往来していた。沖合は魚がよく釣れるが、いくら舟を漕いでもヤホ(櫂)が海に入らなくなることがある。そんな時に声を出して騒ぐとケンムンに舟をゆすられるから、黙って時間を過ごさなくてはならないと言われる怖い海域でもある。

喜瀬浦城

標高約30mのナゴ又山の中央部分から先端にかけて居館跡が確認されている。13、14世紀頃の青磁やカムィヤキが発見され、北側が崩壊している。東側の山に向かう尾根は二つのコブ状土塁で尾根が遮断され、もう一つの尾根も土塁で尾根を遮断している。南側斜面は2段の郭状をなす地形で防御機能を備えた居館施設といえる。

キシブタ(喜瀬豚)

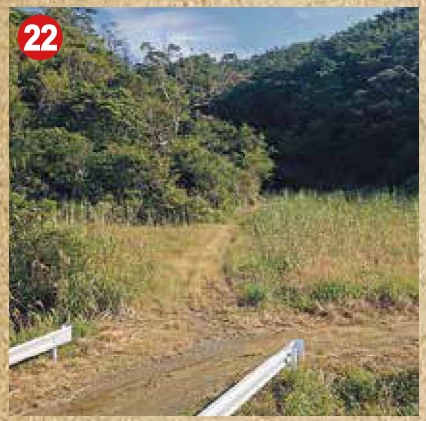
奄美大島では黒色の喜瀬豚を島豚と呼び、島の正月料理には欠かせない。喜瀬豚は戦後、改良が進み鹿児島黒豚の原種ともされている。方言では、キシィウワァ(喜瀬豚)とも呼ばれ、一度に10〜12頭ほどの子豚を産むため、他の集落からもアンピラ袋に子豚を入れて担いで行ったという。イモや魚などを煮たものを餌とし、脂身も美味しくなつかしい味であった。

集落跡

かつて喜瀬浦の田袋奥に数軒の家があり、喜瀬浦集落の始まりとも言われている。ここは水田や畑も近くにあり、海からも遠くないので、海の物も山の物もとれた。更に川も湧水源もあったため、自給自足が可能なシマ(集落)だった。現在は畑として整備され、山裾にソテツバテや田んぼと屋敷の一部がわずかに残る。

古道1

喜瀬集落跡の奥に通じるナガザクからチュマワジダまでは、生活道路としてナナサクの峠を超えて用安に行く古道がある。道路横は川が流れており、谷間を通って山に入る。自然観察道路として良い環境だが、夏場はハブに要注意。



古道2

ナガザクから手花部コッチへの山道も、昭和30(1955)年前半ごろまで生活道路として馬や牛を引いて歩けた。奄美の妖怪・ケンムンが出没すると言われる場所もあり、シマの人々に畏れられていた。現在は荒れており歩くことができないため、入り口付近から眺めるだけである。

ナーバマ(かくれ浜)

潮が引くと年に数回、海の中から砂浜が姿を現す。この砂浜を「ナーバマ」と呼び、シマの人は危険な場所としている。姿を現す砂浜の端は急にニョー(深くなる)になっているため、浅い砂から深みに滑り込み、溺れてしまう可能性もある。また、貴重な魚介類も生息している。
(奄美市一集落1ブランド)

グンムィサンシンとキシ唄

シマの床の間にはサンシン(三味線)と太鼓とナンコ盤が良く飾られる。喜瀬でも喜瀬独特のシマ唄や八月踊り、六調にサンシンや太鼓は欠かせないため、サンシンを弾き、唄い、踊りをリードするのは、シマのリーダー的存在でもある。グンムィは名器とされるサンシンを作った人で、今でもグンムィサンシンとして重宝がられている。

喜瀬3区(浦)(うら)※方言名：ウラ

奄美市一集落1ブランドにも指定されている「かくれ浜」がある喜瀬集落。

大潮の干潮時だけ現れる砂浜で景観のすばらしい観光客に人気のスポットです。また、熱帯・亜熱帯地方に自生する植物「シイノキカズラ」の北限域の生息地である。

昔は、奄美島豚の在来種ともいわれる「喜瀬豚」が有名であったが、今では改良種のみになっています。